

日本をキリストへ 協力

14

「日本をキリストへ」
伝道団体連絡協議会

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1
TEL 03-292-3001

雲の柱、火の柱

協議会副会長 原 登

「主は、昼は途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた、彼らが昼も夜も進んで行くためであった」（出エジプト一三・二一）

エジプトを脱出したイスラエル民族にとって、カナンの地を目指すこの旅路には、大きな困難がはらまれていました。彼らは、荒野を通らねばなりませんでした。果てしなき砂漠を横切することは、小さなボートで大洋を渡るにひとしい冒険でありました。彼らに羅針盤があったわけではなく、リーダーがあったわけでもありませんでした。それでいて、未知のコースを大群衆が移動したのですから、前代未聞の出来事であったと言わねばなりません。大指導者モーセに、生ける全能の神に対する信仰があったために、なした大事な業であったのです。

民族大移動のために、神さまが直接干渉されたのが、雲の

柱、火の柱の意味であります。

それは、神の臨在を意味し、また、神の導きと神の保護のしるしでもありました。

まさに、それは、神の恵みそのものに他ならなかったのです。しかも、ここに「昼」と「夜」とが対比されています。それは、人生における順境と逆境を意味するとも受けとれましょう。主は火の柱、雲の柱の中におられて、「彼らの前を進まれた」とあります。

一九九〇年を迎えた伝道団体連絡協議会は、今日までさまざまな活動を積み重ねて、本年、「救霊への再献身」の年を迎えました。すでに、新年情報交換会を二月十三日に、第六回定期総会を六月十八日に、一日フェスティバルを六月二十二日に、研修会を九月十・十二日と活動予定を組んでおります。

この一年の歩みのために、主がこの団体に属する一つ一つの加盟団体を守り、お導きくださり、相互理解を深めて、さらに主とともに前進できますように、祈ってやまないものがあります。

雲の柱、火の柱を仰ぎつつ前進いたしましょう。

証し

新しい放送伝道の幻を持って

フレンドシップラジオ局長 S・タイガート

私の父は日本に宣教師として来ていましたが、この間ずっと、日本でのキリスト教ラジオ局のビジョンを持ち続けていました。

一九六〇年代の中頃、軽井沢でFM局開設の申請をしていましたが、その試みは実現しませんでした。一九六七年に、私は父とともに、週一回の番組を長野県で放送するようになりました。その番組は五年間ほど続きました。

その後一九七六年に、私はTEAM宣教師の宣教師となり、PBAで働くようになりました。まず、沖縄の極東放送（現FBCの前身）に派遣されました。六カ月後に東京に戻り、PBAで十年間奉仕し、その間七年間は支配人として仕えました。

日本での放送伝道でいつも気になることは、民間局の極度に限られた時間帯と異常に高い放送料の問題でした。放送伝道に別の方法はないものかと、いつも考えていました。放送時間と放送料の制限なしで放送できる局を作るビジョンは、こう

してだんだん大きくなっていきました。

一九八六年に村上先生がPBAの支配人になってから、私はもっと効果的に放送伝道のできる方法を求め、真剣に祈り始めました。その春に、私は初めて有線放送について知りました。そして、ミニFM放送についても考えました。私は、有線放送を使ってミニFM放送実施者に毎日二十四時間番組を送ることができると気がついたのです。

一九八六年九月に、業界最大手である榊大阪有線放送を紹介され、訪ねました。驚いたことに、大有はキリスト教番組のためにチャンネルを貸すことにとても好意的でした。ドアは、広く開いているように見えました。

一九八六年十一月、こうして私はFRの組織編成に着手しました。ゼロからの出発でしたが、神さまは多くの方法を用いて、FRの放送開始を可能とてくださったのです。中でも、FRにスタッフを送ってくださったことは、何にもまして大きな助けとなっています。

今までは、決して安易な時ではありませんでした。有線加入者やミニFM実施者は予想していたほどに伸びませんでしたし、経済的にも安定するに至っていません。長年クリスチャンとして、宣教師として、信仰についてかなりわかっていると思っていました。FR開始以来、信仰によって生きることに、毎日のように新しく学ばせられています。

FRの可能性については、前にもまして大きくなっていくことを教えられています。特にマンション加入者数は、一九八九年の上四半期だけで十七万二千戸が新規登録され、そのすべてがFRを聞く可能性を有しています。

他の方法では福音を聞くことはないであろうと思われる多くの人々に、福音を伝える手段として、この働きが用いられるようにとのビジョンを持ち、願ひ、祈るものです。



FR
Friendship Radio

証し

文書伝道の可能性を

確認させられて

いのちのこば社雑誌部制作企画課長

岡田 哲夫

「主は与え、主は取られる。

主の御名はほむべきかな」(ヨブ一・二一)

一九八八年十月に出版しました、三浦綾子氏と星野富弘氏の対談集『銀色のあしあと』の発行部数が昨年末で十万部を超えました。

「文書を通して伝道を」とのビジョンに立ち、祈って企画し進めた働きに対して、主が豊かに報い、用いてくださっていることを感謝しています。

今回は、著名な人物ということや、一般の新聞・雑誌を使って宣伝活動を行なったということもあり、キリスト教専門店のみならず、全国の一一般書店からも注文が殺到し、驚きとともに感激しました。

発売当初、『鈴のあしあと』とか『銀色の風』とか、思いがけない書名でよく注文が入ったりもしました。タイトルがひとり歩きするのはよい傾向であることを聞いていましたので、注文書を見

るのが楽しみでした。

ある人から、「いい時に、百万人の福音にいま

したね」と言われたことがあります。多分、大きなプロジェクトにかかわったことを指してのことだと思いますが、私としては、神さまの計画と恵みの中にあつての自分の働きだと思っています

ので、自分がどうの、という気持ちはありません。たしかに、大新聞に何百万円も投じて宣伝を売

ったり、行動を起こして反響がすぐに現われるということは、やりがいもありますし、面白くもあります。しかし神さまの側から見れば、神さまほどのような条件下の中でも計画を進められるのですから、その計画の一部を任せていただいているという恵み以外の何ものでもありません。高慢におちいらぬよう、常に注意していきたいと考えています。

『銀色のあしあと』を読んで送られてきた愛読

者カードも三千通近くに達しました。編集部に寄せられるハガキを読むたびに、この方々のために神さまはこの出版を許してくださったのだとつくづく思われます。さまざまな年代と背景を持った読者の方々の一つ一つの感動のこぼれに、ありがたく、また身の引き締まる思いがし、主の御名を崇めずにいられません。

このような経験を通じて、私たちは今、日本における文書伝道の可能性を確認させられています。



※掲載した証しは、昨年十月の一日フェスティバル「賛美と交わりの集い」で証しされたものです。

89クリスマス—IN TOKYO開かる—

昨年十二月十二日、G I C（ゴスペル・インターナショナル・クルセード）による「89クリスマス—IN TOKYO」が日比谷公会堂で開かれました。会場前には、開場前からすでに長い列ができました。外は木枯らしの吹く寒い夜でしたがそれを吹き飛ばすような熱気に満ちたすばらしい集会となりました。

本田師のメッセージは、初めての人にも、クリスチャンにもわかりやすく、クリスマスの本当の意味が語られました。最後に小田師の招きに応じて、前に進み出た人は、二百名以上にも及びました。

音楽は久米大作氏のアレンジによるもので、今までのクリスマス集会において類を見ないような大胆な新しい音楽感覚が入れられました。（その是非については、さまざまの声があったようですが）。

この日の準備のためには多くの祈りが重ねられました。奉仕者も多く備えられ、二千名の参加者に対して、事故や混乱もなく進められました。

今秋の武道館に向けての動員に当たっては、高齢者の参加・協力を求める場合、プログラム内容、

会場設営などにさらに十分な配慮が必要であることが感じられました。

なお、この日の集会には伝道団体連絡協議会加盟の団体より二十六の各種団体の協力がありました。（記／浅見鶴蔵）

◆主催者より一言

本田弘慈

今回、G I C主催の「89クリスマス IN TOKYO」は思いに勝り、多くの皆さんが参加してください、また、久米さんをはじめ、歌手の方の奉仕と、祈りによって行なうことができました。また、各種伝道団体の惜しみないご協力をいただき、すばらしい奉仕をしてくださったことを心から感謝申し上げます。

主イエス・キリストは、私たちを救うために出てくださいました。この喜びの訪れを、今後とも、多くの人々に伝えたいと思います。

これからも、伝道団体が日本の各地においてもたれる伝道の働きに協力して、この新しい年、宣教のみわがが一層拡大し、前進せられることを、心からお願ひ申し上げます。

編集後記

▼伝道団体の働きに携わっている皆さま、いかがお過ごしでしょうか。伝道団体間の相互理解や励まし、情報交換の一助にということ、「協力」が発行されています。ぜひご愛読、ご利用、ご協力のほどよろしくお願い致します。

▼二月一日発行予定が二週間近く遅れてしまいました。申しわけありません。次号は六月の総会後の予定です。

▼二カ月に一回のペースでお茶の水キリスト教会館（OCCビル）にて常任委員会を行なっています。本田会長以下、各委員の出席率も高く、毎回熱意のある話し合いがもたれています。どうぞ、それぞれ多忙な中で奉仕している委員のためにもお祈りください。

発行日 一九九〇年二月十三日

発行者 本田弘慈

編集者 鴻海誠